話 題

平成 27 年度日本水産学会秋季大会を開催して (平成 27 年 9 月 22 日から 25 日, 東北大学 川内北キャンパス, 仙台)

大会委員長 佐藤 實

総務 片山知史

東北大学大学院農学研究科

MINORU SATO AND SATOSHI KATAYAMA

Graduate School of Agricultural Science, Tohoku University

嵐がやってくる!

5 月 1 日夜, 宿泊やバス等の手配をお願いしていた旅行代理店 (JTB 東北) から, メールが入った。「本日, シルバーウィーク (9 月 19, 20, 22, 23 日) に, 嵐のコンサートが利府で行われることが決定しました!」という文面。緊急事態であることを伝えたいという意図が十分に込められてた。翌日 2 日からはシルバーウィークではなく, 本家のゴールデンウィーク。連休明けに実行委員が職場で顔を合わせ相談する前に, 代替策に目処を付けておこうと, 大手予約サイトに載っていないような, 仙台市外の小さなホテルや旅館に自宅から問い合わせるが, ことごとく満室。そのうち, 実行委員会内では「ピンチ」というタイトルで, 「気仙沼が全て満室」「山形市内も無い」「福島も予約で一杯」というメールが飛び交うようになった。

同時期に開催する他の学会が日程変更を決めたという情報も耳に入り, 私達の学会は開催できるのか, という不安に包まれた。しかし私達実行委員会としては, 開催の一年前によく確保した会場 (東北大学川内北キャンパスの講義棟) を手放すことは無念過ぎると思い, 予定通り開催することを決断した。連休が明けると同時に, 大学や地方自治体の宿泊施設を確保しよう奔走。しかしながらことごとく不調。嵐のコンサートの観客は女性ばかりなので, 市内のカプセルホテルが残っていたが, 徐々に空き数も減ってきた。打つ手無しかと思われた。嵐に吹き飛ばされるのか・・・

対策, 取り組み

仙台のシルバーウィークは, 東北の紅葉時期でもあり, 仙台を拠点とする観光客が多いことは既に判っていた。そのため事前に, JTB 東北には部屋の確保を依頼していた。そして水産学会関係の会議のたびに, 早めの予約を勧めていた。JTB 東北には, 改めて部屋数の増加を頼み込み, 何とか約 100 室をおさえた。後は, 会

員個人がどれ位予約してくれているかに掛かっていた。とはいえこのような事態を放置しては, 参加者数が減ってしまい, 研究発表数も予算的にも「大会失敗」という前例の無い惨事に陥ってしまう。そこで私達は, 以下のような方針を立てて取り組んだ。

- ・異常事態でも, 参加された皆様が満足していただける大会にする
- ・宿泊を要しない, 東北支部からの参加者を募る
- ・窮状を訴え, 拠金や広告を広く募る
- ・参加者には, 参加登録時に希望する発表日時と宿泊斡旋の有無を入力してもらい, 確保した宿泊室を有効に活用する

東北支部の会員には, 組織を通じて, また個人にもメールで参加をお願いした。しかし, 予算に余裕のない県試験場や, そもそも大会参加が業務外である県庁の会員は, 事業成果発表もしくはそれなりの理由がないと大会に足を運ぶことが難しい。管理職の方々をお願いして, 参加を認めていただくようお願いに回った。

同様に拠金・広告集めにも足を運んだ。近年, 県や市は「寄付」を出さない (出せない)。沿岸部の小さな町村は, いくら水産・漁業地域であっても, 全てが東日本大震災の被災地であり, 寄付をお願いすることはできない。これまで大会に協力していただいていた業者に加え, 私達とお付き合いのある企業・団体をリストアップ。個々に連絡をとり, 依頼を進め協力をお願いした。

参加者からの発表と宿泊の希望調査は, web 上で順調に進めることができた。しかし, いざプログラムを編成する段に至っては, 専門分野に加え, 口頭・ポスター, 希望日および午前・午後, 宿泊斡旋希望日, そして本人の所在地をいう 5 次元のパズルを解く作業となった。嵐のコンサート最終日である 23 日は, 遠方からの参加者の発表は無理であると判断し, 事前に宿泊を予約できていた方と宿泊を要しない県内の方の発表を集中させた。また当日に来仙する方も多いと予想されるため, 口頭発表の開始を 23 日は午後から, 24 日は 10 時からとした。

そして開催〈写真 1〉

- ・参加人数, 事前登録は 436 名 (学生 111 名, 正会員 317 名, 非会員 8 名), 当日申込が 91 名あり, 合計 527 名。例年と遜色ない人数となった。発表は, 口頭 216 題 ポスター 120 題であり, いずれの会場も充実した発表と討論が行われた (取り消しは, 口頭発表 4 題)。
- ・協賛等は, 協賛 32 社 (個人 1 名含む), 展示 14 件, 広告 27 件であり, とても多くの企業から協力をいただ

写真1 デザイン問題が話題となっていた時期に作製された要旨集

いた。この場を借りて心より御礼申し上げます。

・宿泊については、仙台市内に確保した約100室をフル活用しても、どうしても20数名が泊まれなくなりました。ご迷惑をお掛けしたが、23日夜のみ山形市内のホテルに泊まっていただき、シャトルバスで送迎した。

・日帰り参加者も多いと考え、前年の九州大と同様に全日程にわたってクロークを設けた。23～24日が最も利用者が多く、延べ80名が利用した。

総じて、当日の運営トラブルや来場・参加時の混乱は全く無かった（事前準備や当日受付等では、トーヨー企画からのサポートに大いに助けられた）。シンポジウムや諸会議はスケジュール通りに開催され、会員交歓会を含めて、概ね不便なく快適に参加していただけたようだ。嵐を無事やり過ごした。

例年と異なる企画

秋季大会としては通常通りの内容で行われたが、幾つかの異なっていた点を記載しておきたい。

・会員交歓会〈写真2, 3〉

仙台駅西口AER21階で開催した。参加者は139名。来賓として笠原恵介氏（宮城県農林水産部次長）、丹野一雄氏（宮城県漁業協同組合経営管理委員会会長）、駒井三千夫氏（東北大学大学院農学研究科長）、南澤正氏（WFC2016実行委員長）にご臨席いただいた。今回は特に余興等はなく、ゆっくり歓談していただいたが、一つ大きな「出し物」を用意した。佐藤實大会委員長が開発し、本大会でも研究発表やシンポジウムでも取り上げた「電磁波照射迅速解凍技術」によるクジラとマグロである。世界で一台の解凍機を交歓会会場に持ち込み、性能を見てもらうとともに、解凍品を刺身や竜田揚げで試食していただいた。冷凍クジラやマグロは、仙台水産、石巻魚市場および阿部亀商店からご提供していただい

写真2 会員交歓会において、電磁波解凍のクジラ、マグロをふるまう、佐藤委員長

写真3 電磁波解凍機に見入る参加者

た。試食された皆さんから、「ドリップがなく、しっとりと濃厚な味わいがある」との感想から、「クジラがこんなに美味しいとは知らなかった」、「本物のマグロを食べた感じがした」など、大好評で、高い評価をいただいた。この他、牛タンや芋煮や地酒も用意され、仙台のグルメを楽しんでいただけたようだ。ご協力していただいた皆様、準備に当たった皆さんに深く感謝いたします。

・復興エリアエクスカージョン〈写真4〉

本大会は、東日本大震災後、東北で初めて開催された大会である。漁業生産量自体は震災前の7～8割にまで回復したが、沿岸部ではまだその傷跡が残っている。震災後4年以上経過したが、仮設住宅には未だ多く方がおり、元の居住地における人々の生活は全く戻っていない。秋季大会の中でも、震災後の海洋生態系の推移や、漁業生産における課題、および養殖や加工における新たな技術展開について多くの研究発表があった。本エクスカージョンでは、現地でしか触れることのできない、干

写真4 亘理魚市場で、漁協職員の話をもとにメモを取りながら聞く参加者

潟踏査と現場の方との情報交換を行った。

11名が参加した。26日朝、仙台駅を貸切バスで出発し、まず七北田川河口の蒲生干潟に赴いた。途中、居住が疎らな蒲生地区に、まだ半壊状態の家も残っていた。一度は天津波で海の一部となった蒲生干潟であるが、2-3年経過して、ようやく元の姿（地形・底質、塩分、ベントス相）に戻りつつあることを紹介した。そして、七北田川を挟んだ向こう岸の海側には、巨大な防潮堤が出来ており、そのコンクリートで覆われた海岸線を直に見ることができた。

その後、名取川、阿武隈川を渡って、荒浜漁港に向かった。土曜日であったので、水揚げを見ることはできなかったが、船ひき網、小型底びき網、刺網、貝桁網などの漁船や漁具、仮設の荷捌き所や活魚施設を見学した。丁度昼時だったので、旬のはらこ飯（鮭の身をつかった炊き込みご飯の上にイクラを乗せたご飯）と鮭の白子のフライを堪能。その後、県漁協亘理支所の職員の方から、震災による被害、その後の再開状況についてお話を伺った。底びき網の漁業者は1/2、刺網は1/4に減ってしまったが、ヒラメ資源が大変多くなっていて、各漁船の漁獲量も大幅に増加し、支所全体の売上も約1.5倍に増えた。ただし、漁業者が今後このまま減ってしまうのを懸念しているとのことだった。参加者からも多く質問が出され、特に初めて被災地を訪れた方には重要な情報交換になったようだった。仙台空港、仙台駅に参加者をお送りし終了した。

・高校生による研究ポスター発表

春季大会だけでなく、近年は秋季にも開催されていたが、同時期に東北地区で同様の水産系発表会があること、宿泊や交通が混雑し大変な不便が掛かることから、今回は断念した。3校から連絡があったが、期待に応えられず、申し訳ありませんでした。

・日中韓シンポ

国際交流委員会主催の第三回日中韓水産学会合同シンポジウム“Current status of research on fishery resources in East Asia”が25日に開催され、主に資源生物学系の計9名のシンポジストが報告した。中国の漁業生産の現状や、韓国の密度の濃い調査結果など、内容はとても充実していたが、聴衆が若干少なかったのが残念だった。総合討論では、海洋生物の資源状態やデータについての状況共有は、相互の研究の発展につながる事が確認され、次回の開催への意思統一が図られた。

なお、シンポ・ミニシンポ、各委員会の講演会等については、東日本大震災後の漁業復興に関連した東北漁船漁業の復興・現状と課題、水産業の復興・創生につながる新技術開発、水産増養殖で地域興し、東日本大震災以後の貝毒の問題、また業界の話題となっているフグ食の安全性確保など、重要なテーマが取り上げられた。不便の多い条件であった中、シンポジストの日程調整など苦勞も少なくなかったが、いずれも参加者が多く盛会であった。

・海外からの参加者

日中韓シンポの報告者を除いて、中国5名、台湾4名、韓国2名、インドネシア5名の参加があった。海外からの参加が増えることは、とても喜ばしい傾向であるが、ビザ申請のために、実行委員長からの Invitation letter や 招聘理由書、身元保証書等の書類を作成し、EMS（配達証明付きの国際スピード郵便）で送る作業が求められる。予め担当者を準備しておいた方がいいかと思われる。

総 括

嵐に翻弄されながら、無事滞り無く開催できた。しかし、やはり宿泊や交通での不便を考えると、参加を控えた方も少なくなかった。コンサートだけでなく、大きなイベントが開催されると、都市の大小に関わらず宿泊が出来ない事態が生じてしまう。今回の嵐の影響については多くのテレビで伝えられたが、地方紙・全国紙では、大規模イベント開催時に地域が混乱することが問題視され論評されている。学会や大きな会議は、会場確保を約1年前にしなければならない。大規模イベントの発表はせいぜい半年前である。しかしイベントの会場・日程はもっと事前に決まっているはずである。どこかで調整できないものかと考える次第である。

今回、1件の放映、3件の取材があった。それらの多くは震災後の漁業の問題に関したものであった。東北地域内でも、漁業や被災地産業は既に復旧済とされている感がある。エクスカージョンで見たとおり、被災地の町の復旧や住民の生活は、まだまだ戻っていない。今回の秋季大会が、私達水産学会員にも、また市民に対して

も、水産業の復興には課題が残されていることを改めて知らせるきっかけとなったと思われる。水産学会の活動を通して、引被災地水産業の現状を発信し、課題を問うことを引き続き行っていく必要があり、それが私達現

地会員の役目でもあると考える。次回、仙台で開催される時に、東北の漁業や漁村がどのような状態になっているか。再び、嵐ならぬ大きな自然災害に見舞われてないことを願うばかりである。